

SICE 計装技術交流部会主催 “よく知る会” 環境評価手法の最新動向 (ISO14000 から環境マーケティングへ)

キーワード：
JL 0010/04/4310-0806 ©2004 SICE

SICE 計装技術交流部会主催の “よく知る会” が昨年 12 月 9 日 (火), 株式会社東芝殿会場で開催されました。

当日は、普段日常的に会話はしているものの、その理解度についてはなほ疑問な「地球環境保全」、「ISO14000」、「省エネルギー」等の関係について、株式会社山武環境事業推進本部の篠塚英一氏を講師に迎え、講演が行われました。約 2 時間半という短い時間でしたが、わかりやすい説明と活発な質疑応答が行われ、参加者の日頃の疑問もかなり解消されたと確信しております。以下に講演の概要と所感につきましてご報告します。

講演目的

環境負荷が地球温暖化、大気・水質汚染、ダイオキシン等々、さまざまな環境問題で構成されることにより、数値化に困難はあるものの、経済産業省、環境省もバックアップした中で環境負荷評価の考え方と基礎データの整備が行われ、すでに環境先進企業での取り組みも進んできている。そうした現状を捉え、ISO14000 とは何か、その導入のポイントは、地球環境保全の数値化は、許容数値とは、といった基本的な環境問題・環境法規制等を紹介すると共に、すでに実施している企業での取り組み方法、環境保全促進のためのコストと環境負荷評価方式等を併せて紹介し、真の地球資源の持続と環境保全、さらにはその中で企業の生き残り等についても紹介を行う。

講演内容

1. 地球環境問題と改善への取り組み
2. 持続可能な発展のためになすべきことは
3. ISO14000 シリーズとは
4. 環境経営とエコエフィシェンシー (エコ効率評価)
5. 省エネルギーとエコエフィシェンシー向上、エコエコプロセス改善

地球環境問題と改善への取り組み

「地球サミットから始まった地球規模環境問題取り組みへの経緯、それに係わる会議・機関・条約、特に緊急課題となっている地球温暖化対策・省エネ法の係わり等について、具体的な数値目標等を含めての紹介。」すでに 1972 年の国連人間環境会議からはじまり、1992 年の国連環境開発会議 (地球サミット) でのリオ宣言から本格的に始まった温暖化防止への国際的な取り組みについて、知ることができた。

持続可能な発展のためになすべきことは

「企業持続のための重要な 3 つの柱といわれている経営・環境・社会の中で、特に FACTOR8 にて規定される資源量および環境負荷量低減義務、それら 3 つのバランスをとる重要性についての紹介。」企業間の環境格付けを視覚的に

訴え致命的な差別化要因とする Sustainable Management Tree による表現方法や、2050 年には現在の資源の 3 倍が必要となり、そのために資源生産性向上を図る義務について理解できた。

ISO14000 シリーズとは

「やはり地球サミットを機とした環境 ISO の生い立ち、その構成内容、その活用による企業メリット等についての説明。」基本的に ISO14001 は環境マネジメントのための規格であり環境への影響を考慮・マネジメントすることを求めたものである。ただ、これを義務と捉えるのではなく、それを具体的に実現していくことが、企業製品のコストダウンに直結しており、企業メリットとなっていることが再認識できた。

環境経営とエコエフィシェンシー (エコ効率評価)

「環境問題を前向きにする環境パフォーマンス評価のためのエコ効率の数値化 (生産性評価と同様な評価式)、ISO14040 ライフサイクル影響評価での環境負荷算出方法、具体的に異なる業種毎の環境対策パターン等についての説明。」きちんとしたライフサイクル評価により、原材料を抑えるか、廃棄物を抑えるか、その企業業種によりまったく異なり、対応に差が生じることが自然であることが理解できた。

省エネルギーとエコエフィシェンシー向上、エコエコプロセス改善

「省エネ対策項目立案のステップから、環境負荷評価、環境効率を基本としたコストとの評価方式、実際に東京電力殿で公開されているエコエフィシェンシー指標の推移状況の説明。」エコバランスと環境負荷算出方式により、環境と経済両側面を考慮した、プロセス改善が可能であることが理解できた。

(計装技術交流部会：株式会社山武 金子耕三)

(2004 年 7 月 29 日投稿受付)

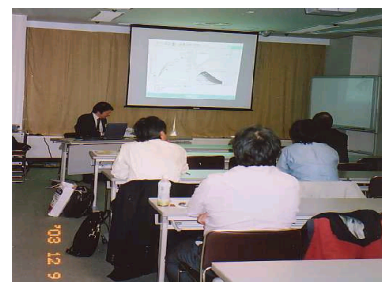


写真 1 講演会会場風景